

帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.27

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

- 甘粕前館長を偲んで —アマケン時代— P.2
- 特集1 友好提携館「西安博物院」
—友好提携五周年を迎えて— P.3
- 特集2 第九回むかしのくらし展
「くらしの道具」 P.4
- 常設展示室から クズワラ P.5
- おすすめの一冊 新潟市の伝説 P.5
- 特集3 みなとびあ活動展示2012
「みせる」 P.6
- 館長日記 御伽草子「物くさ太郎」より P.7
- 収蔵資料紹介 ヤチキリガマ P.7
- 博物館を支えるモノ・もの テグスとチューブ P.8



旧第四銀行住吉町支店の会議室で行われた
「第3回みなとびあで絵を描こう」の表彰式の様子

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.27

■ 帆檣成林「はんしょうせいりん」第27号
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■ 印刷／株式会社博進堂

【たいけんのひろばプログラム】 楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象・参加費
11月10日(土)・11日(日) 14:00~15:30	企画展関連プログラム 衣服のたたみ方を 比べてみよう	和服と洋服のたたみ方を比べます。 どんな違いがあるかな？	不要 無料
12月2日(日) 14:00~15:30	キャンドルスタンド づくり	いろいろな木の実をつかって キャンドルスタンドをつくります	必要(11/24必着) 200円
12月8日(土)・9日(日) 14:00~15:30	企画展関連プログラム むかしの道具に囲まれ ながら昔話を聞こう	いろいろな道具に囲まれながら 昔話を聞こう！	不要 無料
12月15日(土) 14:00~15:00	小さな和とし本づくり (*注1)	むかしの本づくりを実際に やってみよう	不要 小学生以上10名 200円
12月23日(日) 11:00~	もちつき！	毎年恒例、もちつきをしよう！ *材料がなくなり次第、終了します	不要 無料
1月5日(土)・6日(日) 14:00~15:30	正月遊び	すごろく・かるた・こまなど 正月ならではの遊びをしよう！	不要 無料
1月12日(土) 14:00~15:30	小正月を たいけんしよう	まゆ玉作りをして、むかしの 正月飾りをたいけんしよう！	不要 無料

(*注1) プログラムのなかでカッターを使用するので、低学年の方は大人の方と一緒にご参加ください
お申込みは、お名前・連絡先電話番号を記載の上、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。
プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

大人向けモノ作り体験 全2回 「わらぞうり作り」

わら細工の名人、黒崎民具保存会
の方々から、わらぞうり作りを学
びます

【日時】

①2012年11月24日(土)

②2012年12月1日(土)

14:00~16:00

*2回連続のたいけんプログラムです。

【申込締切】11月13日(火) 必着

【定員】両日参加できる

16歳以上の方、9名

【会場】博物館敷地内

【参加費】無料

参加ご希望の方は、電子メールま
たは往復はがきに、氏名・住所・連
絡先電話番号を明記のうえ、当館
「わらぞうり係」までお申し込みく
ださい。

現在開催中 企画展 第9回むかしのくらし展「くらしの道具」

高度経済成長以前のくらしを支えていた基本的な道具を取り上げて、
現在のくらしに関わる道具との違いをみていきます。
そしてその違いから、時代や生活スタイルの変化についても紹介します。

【会期】2012年9月15日(土)~12月16日(日)

【休館日】11/5(月)・6(火)・12(月)・19(月)・26(月)・27(火)
12/3(月)・10(月)

【観覧料】無料 *常設展の観覧は有料です
*「相国寺・承天閣美術館コレクション展」
(9月29日(土)~11月25日(日))は、
別途観覧料が必要となります

関連たいけんプログラム

「衣服のたたみ方を比べてみよう」

【日時】11月10日(土)・11日(日) 14:00~15:30

「むかしの道具に囲まれながら、昔話を聞こう」

【日時】12月8日(土)・9日(日) 14:00~15:30

どのプログラムも参加費無料・申込は不要です

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、
毎月第4日曜日にお話します。
時間：13:30~15:00 会場：本館2階セミナー室
申込：不要。当日受付、定員50人程度 資料代：100円

- 11月の講座：11月25日(日)
「新潟の近代建築—導入と発展—」 講師：小林 隆幸
- 12月の講座：12月23日(日)
「蒲原平野の開墾技術Ⅱ」 講師：岩野 邦康
- 1月の講座：1月27日(日)
「新潟の絵師たち」 講師：並木 晴香
- 2月の講座：2月24日(日)
「高野山清浄心院「越後過去名簿」をめぐって」 講師：田嶋 悠佑

次回 活動展示2012 企画展 みせる

「展示・公開」にまつわる博物館の活動の一端に焦点をあて、
資料を展示し、資料の情報を伝えるために行われる、展示技
法や情報編集などを紹介します。

【会期】2012年12月8日(土)~2013年2月24日(日)

【休館日】12/10(月)・17(月)・25(火)・28(金)・29(土)・30(日)・31(日)
1/1(火)・2(水)・3(木)・7(月)・15(火)・21(月)・28(月)
2/4(月)・12(火)・18(月)

【観覧料】無料 *常設展の観覧は有料です

【ワークショップ】
当館学芸員によるワークショップが開催されます。
詳細な日程や内容は、チラシやHPでご確認ください。

博物館を支えるモノ・もの <テグスとチューブ>

資料を展示台などに固定するためにテグスを使います。資料が展示位置から
動かないように、地震がきても倒れたり跳ねたりしないようにするためです。
テグスは丈夫な上に透明なので、見る人の比較的邪魔にならないのです。
テグスを展示台に打ったピンに縛り付け、そのテグスをしっかり張って資料を
縛ったり押さえたりします。テグスが資料を痛めないように、資料に当たる部分はクッションとなる透
明なチューブに通します。
テグスは、資料を痛めず、しっかりと留まり、かつ、見る人の邪魔にならない場所を考
えてかけます。この作業には経験と技術、注意力と集中力が必要
です。



編集後記

「帆檣成林」第27号はいかがでしたか。今回は、
8月に亡くなったみなとびあの前館長・甘粕健氏に
ついて追悼のページを設けました。9月にはお別れ会も開催され、多くの方々にお
集まりいただきました。ご冥福をお祈りいたします。また、現在開催中のむかしの
くらし展や、次回開催予定の活動展示など、みなとびあの企画展についても取り
上げました。興味をお持ちいただき、ご来館いただければと思います。今年は残暑
も厳しく、暑い日が続きまして。これから冬に向けてだんだんと気温が下がって
いきますが、みなとびあでは企画展やイベントなど引き続き実施しておりますの
で、ぜひご家族揃って足をお運びください。お待ちしております。(並木)

お問い合わせ・申込みは博物館まで・・・

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
TEL:025-225-6111 fax:025-225-6130
E-MAIL:museum@nchm.jp
休館日：毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間：9:30~17:00



甘粕前館長を偲んで——アマケン時代——

新潟市歴史博物館館長
小林 昌二

甘粕健前館長が去る八月四日、肝不全のためご逝去されました。満八十一歳でした。

翌五日の密葬の後、九月十七日に行われたお別れ会と偲ぶ会とは各地から五百人に及ぶ多くの方々が駆けつけて下さいました。

その中に青山学院初等部で同級生だったお二人がおられました。

そのお二人は、小学校時代の甘粕さんを「アマケン」と呼び、その「アマケン」がなかなかの腕白だったと教えてくれました。加えて私たちがお別れ会で配布した年表で、甘粕さんの考古学への事始めを「府中中学時代」としているのは正しくない、すでに小学校時代に兆していたと言ひ、「ほら本人もそんな風に書いていたでしょう」と、二〇〇五年刊の「青山学院初等部同窓会『くすのき会』」第八号をひろげて見せてくれました。

その卒業生リレーエッセイ欄に甘粕さんが写真入りで「今だから告白します」というタイトルで、「少年が考古学に出会うまで」という回想文を執筆していました。

日本と新潟の誇る古墳時代研究者の故人の考古学への関心が、いつどのよう

ります。

これまでは、疎開先の広島県府中中学校在学中に神谷川遺跡を発見し、同校考古学者豊元国教諭に師事したと伺ったこともあって、これが関係者の定説になつていました。もはや語ることでできなくなった故人が、そのズバリのタイトルで寄稿されていたことを私たちは調べる暇もなく、よしとしていたことに反省を迫るものでした。今は潔くこの怠慢を教えて下さったお二人に紙面を借りて深く感謝を申し上げる次第です。

さて、この回想文で「アマケン」時代を故人がどう記しているか、紹介してみよう。

まず、「私はアマケンと呼ばれた少しヒョウキンな暴れん坊でした」と記します。この自己認識は同級生のお一人が、「学校の帰りに東横線の電車の中でアマケンは吊り革遊びなどに興じて大変だったのよ!」と証言風に仰つたことに符合します。これが「アマケン」の身体と性格の間違いない個性であったことが分かったのです。

一九八六年に私が新潟大学に赴任して甘粕さんの隣の研究室に入りまして。ほどなく甘粕さんが、膝を曲げずに体を前屈し、両手のひらをあつさり

床につけて見せてくれたことがありました。五十代半ばの年齢が嘘のような柔軟さに驚きました。

その甘粕さんは四年後の一九九〇年の師走、学内走行規制二〇キロの処を四〇キロで不法に入構した車両にはねられて、一〇メートル以上もとはされ(警察検証)、指や恥骨の骨折という二ヶ月の重傷を負いました。しかし背骨や大腿、頭蓋骨などの大々事に及ばなかったことは偶然とは思えません。

翌年八月、重傷が幾分か癒えて早速に飯綱山古墳群見学のご案内を頂くことになりました。古墳への山道を杖をつきつき登られるお姿になお後遺症を危惧していましたが、

古墳域に入るや藪や勾配をものともしない速やかな歩きっぷりに、みんながびっくりしたことが忘れられませんが、「暴れん坊」の身体であれば納得できるものですね。

回想は次いで、三・四年生では「しばしば不登校状態」



(こばやし しょうじ)
新潟市歴史博物館館長

で学校を休んだこと、そのときに歴史や考古学の本を色々読んでいたことを記します。五年生になって歴史が専門の大内先生に出会って、「歴史のおもしろさ」にわくわくしました」と語り、また同級生が「後に私が研究者になったのを見て『アマケンは初志を貫徹したね』と祝福してくれました」と記しています。

この甘粕さんの考古学への入門は、逆境の中で時間をかけた幅広い読書が、考古少年に向かう「アマケン」の心を涵養していったものとして回想されている

特集1

友好提携館「西安博物院」

—友好提携五周年を迎えて—

二〇〇七年五月十八日、西安博物院が開館し、同日、当館と西安博物院は友好館として提携しました。開館式典が行われる中、当館の甘粕健館長(当時)と西安博物院の向徳院長が友好提携の議定書に署名し、学術研究や広報、両市の文化的交流などで協力することを確認しました。

新潟市と西安市との縁は、一九九八年に新潟—上海—西安の航空便が就航したことにさかのぼります。その後両市で時を同じくして博物館を建設していることが話題となり、開館後に博物館同士の交流を進めることへと縁が広がって



友好提携の調印式

いきました。そして先に開館する当館で西安市所蔵の文物を紹介する展覧会を行うことになり、二〇〇四年に当館と市美術館の二会場で「長安文物秘宝展」を開催し、二〇〇七年に、両館(院)が友好提携するに至りました。

西安はかつて長安と呼ばれ、周・秦・漢・隋・唐など中国の歴代王朝の都が置かれた中国を代表する都市です。遺隋使・遣唐使などで日本ともかかわりがあり、古代の日本は制度や都づくりを長安の都に学びました。特に唐の長安はシルクロードの起点としても栄え、当時、世界最大級の大都市でした。西安には歴代の王都を示す史跡や文物が数多く残っています。

今年、両館(院)が友好提携をしてから五周年目にあたります。それを記念し、当館では文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業)の認定を受け記念事業を行ってきました。その一つとして、七月六日—九日には、「西安博物院と古都西安の魅力を探る特別な4日間」と題した市民対象の現地ツアーを実施しました。ツアーには三〇人の市民が参加し、出発前の事前学習を経て西安博物院に向か

いました。

西安博物院は、西安市の中心市街地に建設されました。敷地面積は約一六ヘクタールに及び、そこに唐代の建築物である小雁塔が建っています。これは、陸路でインドから経典を持ち帰った玄奘に続き、海路でインドに渡った義浄が持ち帰った経典を納めた施設です。塔はレンガ造りで六四八年に建立されました。現在は一三層で高さは四八メートルですが、当初は一五層で高さは八八メートルであったとされています。則天武后が夫の高宗を改善するために建立した薦福寺の施設でしたが、寺は残っていません。

新築された博物院の建物の総面積は一六〇〇〇平方メートルで、「天圓地方(天は丸く、地は四角)」という中国古代の伝統的理念が形に取り入れられています。

館内の展示の基本テーマは「古都西安」です。歴代王朝の都であった西安の歴史や文化について、都の模型や建築部材、各時代の特徴を示す文物で紹介しています。精巧な造りの青銅器や、写実的で躍動的な造形の唐俑や唐三彩が立ち並び、中国の古代の技術の高さがうかがえます。この基本テーマのほかに、仏

小林 隆幸

像、玉器、書画、印章の四つの文物について専門のテーマを設けて紹介しています。

また、展示見学を補助する解説員やオーディオの解説機も用意されています。解説員はニーズに合わせて一般解説・専門解説・外国語解説に分けられています。解説機は、中国語・英語に対応しています。

西安博物院では、ボランティア活動も活発に行われており、その活動は館内の解説のほか、体験イベントや文物の記録や写真撮影など多岐にわたっています。研修と試験を経てはじめてボランティアに登録され、その数は三〇〇人を超えているとのこと。

ボランティア活動とともに教育普及活動も活発に行われています。博物院の教育推進部を中心に、端午、七夕、圓正月など行事にあわせて子供向けのイベントをはじめ、さまざまな取り組みが企画されています。

このように西安博物院は内容も運営も充実した博物館です。当館では、文化交流をさらに進め、両館(院)の協力関係を深めていきたいと考えています。

(こばやし たかゆき 学芸員)

第九回むかしのくらし展「くらしの道具」

並木 晴香

新潟市歴史博物館では、開館以来、毎年「むかしのくらし展」を開催しています。これは小学校の社会科の単元にあわせたもので、子どもたちに昔のくらしの知恵や工夫、使用していた道具などを学んでもらうことを目的としています。毎年違ったテーマを設定しており、第九回目の今回は、くらしの基本的な道具に焦点をあてました。

人々のくらしには、生活の基本となる衣食住の道具や生活にゆとりを与える道具など、いつの時代も様々な道具が関わっています。それらは、時代や生活スタイルの変化によって、次第に移り変わってきました。なかでも明治以降に訪れた西洋化の波や戦争による荒廃と復興、そして昭和三十年代頃からの高度経済成長は、くらしの道具にも多くの影響



を与えました。今回のむかしのくらし展では、明治時代から昭和四十年代頃までの基本的なくらしの道具に注目し、現在の身の回りにおける道具との違いや共通点、そして変化した生活スタイルを紹介しています。本稿では、展示会の構成に基づいて道具の変化の概要をみていきます。

着るものに関する道具のなかで特に注目すべきものは、洋装化にともなう道具の変化と、高度経済成長期からの電気洗濯機の普及です。洋服の着用は明治以降少しずつ広まっていき、昭和三十年代頃にはほとんどの人が洋服を着るようになりまし。それにとりま、衣紋や衣紋掛けといった和服に関わる道具が日常的には使われなくなっ。また、洗濯板とたらいを使った洗濯は、「三種の神器」のひとつである電気洗濯機の普及によって見かけなくなりまし。食べることに関する道具は、調理をするためのもの・食事をするためのもの・食べ物を保存するためのものなど様々な種類があります。そ

の中で特に大きく変化したものは、ガスや電気の普及によって見られなくなっ「かまど」とそれに関連する調理道具です。かまどが家から姿を消した理由には、土間を設けなくなった住宅環境も挙げることができま。ガスや電気が一般の家庭にも普及し、ガステーブルや電気調理器が日常的に使用されるようになったことが一番の理由に挙げられます。かまどが使われなくなっことに、かまどに火をおこすための火吹き竹や洪扇、炭火を移動させるための十能、炭火を消すための火消しつぼなども、くらしの道具としての役割を終えていきました。ご飯を炊いていた羽釜はガス炊飯器、電気炊飯器へと姿を変え、現在も高機能化が進んでいます。また、電気冷蔵庫が普及して水冷蔵庫が使われなくなり、調理した食品を冷蔵庫に入れるようになったため、蟬帳も見かけなくなりまし。一方で、包丁やまな板、すり鉢などの調理道具は、その素材が多様化したものの、現在でも変わらず使われています。食事をするための皿や箸、湯のみといった道具も同様で、人々の生活スタイルが変化をしても、私たちの身近な道具となっています。

住まいに関する道具もいろいろな用途のものがあります。代表的なものとして暖房器具や照明道具があげられます。これらも、家族のあり方や住宅環境、生活水準の変化にあわせて様々に移り変わっ。ガスや電気が普及するまでは、炭火を使った炬燵や行火、火鉢などで暖まっ。ろうそくや石油ランプを使ってあかりをとっ。しかし、次第に電気が使っ。このほかにも、ガラス製のハエトリやダイヤル式の黒電話など、少し前までは当たり前にくらしの中にあっ。多くの道具が姿を消しまし。今回の「くらしの道具」では、葉箱や、懐中電灯の前身であるガンドウなどの安心・安全面から使われてきたもの、ラジオやテレビなど余暇の楽しみや情報を得るために現在も使われているものなど、衣食住に関わるもの以外の道具も紹介しています。それらの道具は、変化をしながら様々なかたちで現在も私たちのくらしの中にあります。

本展は、実際にこれらの道具を使われていた方には懐かし、子どもたちにとっては、はじめての道具に出会う機会となると思ひます。ぜひご家族でいろいろな話をしながらご覧ください。なお、今回のくらし展は企画展示室ではなく、たいけんひろばで開催してあります。(なみき はるか 学芸員)

常設展示室から

クズワラ



蒲原の平野部農村では、松葉やヨシのほか身の回りの可燃性のある植物を組み合わせ、料理や暖房などに必要な燃料としてきました。クズワラも燃料として利用されました。すぐ燃え尽き、煙も出るの良燃料とはいえませんが、稲作の副産物であるワラはこの農村部では非常に入手しやすい素材でした。

クズワラとは、ワラを利用する過程で残った、切れ切れのワラの葉を集めたものです。ワラの利用は、まず根刈りでイネを収穫し、イナコキをしてモミを外すことから始ま。この根刈り・脱穀という二つの作業によって、ワラの利用が可能になります。次に、ワラスグリをしてワラの稈から葉(ハカマ)を取り外します。

ワラの葉は、保温性がよく、稈を取り去ったことでふわりと柔らかい性質を持ちます。この性質を生かして、ワラの葉を木綿の布団皮に詰めたものをクズブトンと呼び、敷布団として使うと大変暖かく眠ることができたそう。他にもワラの葉は、牛馬の飼料やシキワラなどに使われ、糞尿のついたシキワラはさらに肥料として使われました。不要な切れ端を集めて燃料にする利用の仕方は、無駄なく徹底しています。

また、葉を取り外したワラの稈は、ワラウチといって横槌で叩いて、柔らかくしなやかな強さを持たせ、ワラ細工の材料として使われました。モミガラも燃料や保温材、肥料などに使われます。ワラの利用は、ワラゾウリやワラジ、ミノや背中当てなど衣料に

関わるもの、鍋敷きやオヒツチグラなどの食に関わるもの、クズブトンやワラ葺き屋根など住に関わるものまで、広く生活全般に及びまし。このようにクズワラは単なる自然物ではなく、ワラの利用の過程の中で、最終的に作り出される加工物といえます。蒲原の平野部は、今も稲作の盛んな地域ではありますが、現代の日常生活ではワラを使う機会はほとんどなく、ワラを利用するための加工の知識・技能も必要でなくなっ。私たちにとって、生活必需品は購入するものであっ、自分で作ることは考えられな。クズワラは、収穫したイネを余すところなく利用した先人の知恵、身の回りの材料から生きるための資源をつくり出す力を伝えてくれます。

森 行人(もり ゆきひと 学芸員)



ワラスグリの様子

おすすめの1冊

新潟市の伝説

この本は合併後の新潟市内にある伝説をダイジェストで紹介したものです。伝説とは、どこの話かわからない昔話に対し、土地に根ざしたかたちで伝承されてきた口承文芸です。この本は、本館の映像で見ることのできる「黒鳥伝説」をはじめ、鳥屋野の逆竹や王瀬長者など有名な伝説からあまり知られていないものまで幅広く取り上げています。出典が明記されているので、各伝説を詳しく知りたい方にも恰好の書といえるでしょう。

歴史研究は、紙や考古の史料だけでなく、実は伝説も参考にします。もちろん、それらが事実を伝えているとは限りませんが、伝説には当時の風習や景観が描かれており、史料に現れない社会の姿を補充することもあ。かつての蒲原平野の様子を再現してない私などは、洞をめぐる伝説を興味深く読みました。例えば福島湯の怪火や鎌倉湯の大蛇伝説を読むと、うすうすびしく、不気味な湯の雰囲気想像されました。

突拍子もない話が多い伝説ですが、その話の背景を少し考えてみるのも一興ではないでしょうか。(田嶋 悠佑 学芸員)



新潟市 編集
文久堂
2006年3月

みなとびあでは、平成二十二年度から、冬季に活動展示という企画展を開催しています。これは、従来の企画展とは一線を画す、博物館の活動そのものを紹介する展覧会です。

活動展示開催の背景には、予算縮小のため従来の規模での展覧会開催が困難になったという事情がありますが、これを機に、通常の展覧会では表現されない、博物館の日常のさまざまな活動を市民のみなさんに知ってもらえる機会として実験的なことを盛り込みながら運営することを心がけています。

過去二度の活動展示では、資料の調査研究をテーマにした「ひきだす」、資料保存や文化財レスキューなどをテーマにした「伝える」を開催しました。そこで、三回目となる今年の活動展示は、「みせる」をキーワードに、博物館の基



資料を額装して展示する (2008年度収蔵品展より)



文書展示の工夫 川村修就とゆらぐ幕府支配 (2006)より

点を当てることにしました。

【公開する】

博物館が収蔵している資料は市民共有の財産で、これらを公開することは博物館の使命のひとつです。しかし、一方で、資料を後世に向けて保存する、ということも博物館の使命です。このふたつの相反する使命をバランスよく行うことが博物館に課せられた命題でもあります。

公開により起こり得る資料への影響には、温湿度や空気環境など、いくつもの要因がありますが、避けられないのは光の暴露です。特に光に含まれる紫外線は資料の退色や変色、劣化を招きます。一般的に資料が光から受けるダメージのうち、九五パーセントが紫外線に由来するとされています。そのため、多くの博物館では、蛍光灯を使用する場合などでも紫外線をカットするコーティングが施されたものを用いています。しかし、光の作用を完全に防止できるものではないため、展示期間が長期に渡れば、その分ダメージが資料に蓄積するのです。このため光の影響を受けや

すい顔料や繊維素材の資料については、長期間の展示を避けるなどして、資料の保護をはかります。

今回の展示には、国指定重要文化財の菖蒲塚古墳経筒出土品をはじめ、館所蔵の新潟町会所文書(新潟市指定文化財)などを出品する予定ですが、会期が六十二日間と長期に渡るため、会期半ばで展示替えを行います。展示資料によっては、資料保護のため、展示されない期間があることをご了承ください。

【展示する】

博物館における展示では、個々の資料を展示・解説し、それら資料群を組み合わせて、資料群が紡ぎ出すテーマ、物語を構成します。展示ストーリーと呼ばれるものです。さらに、展示室内の順路や資料の配置、展示空間のデザインや照明など、さまざまな展示技法を組み合わせています。今回の活動展示では、展示資料とその資料の特性によって、どのような展示技法を実践しているのか、という点も紹介します。

例えば、古文書を展示する際、資料を並べるだけでは古文書を読める人だけしかわからない展示になってしまいか、多くの観覧者に、何が書いてあるのか、どの部分が文書のキーポイントになるのか、ということが伝わっていないければ展示の効果は半減します。そこで、解説文や書き下し文などの補助を加え、観

覧者の理解を促します。補助は、これまでの展示での展示観覧者の反応を反映しながら、あるいは展示制作者である私たちが目指すように工夫をします。また、どのような資料であれ、展示の際には、その資料が持つ情報を抽出し編集することが必要となります。この編集の方向性は、展示観覧者の資料の見方にも作用します。

このように、資料を展示するにあたり、その資料をどのように見せるかというテクニックや、どのような情報を組み合わせるテーマを表現するのかという、展示というメディア特有の「見せ方」についてみなとびあの事例を通して紹介したいと思います。

今回の活動展示でも、週末にワークショップを開催します。展示につながることを考えるものなど、様々なアプローチで来館者のみなさんと「博物館の展示」をテーマとしたコミュニケーションを図りたいと思います。会期は十二月八日(土)から二十四日(日)までです。ぜひ、ご来館下さい。

(あいの かわり 学芸員)

御伽草子「物くさ太郎」より

半世紀前に学生であった私は、御伽草子の「物くさ太郎」をテーマに、中世文学のレポートを提出したことがあります。

「のう、申し候わん、それに餅の候、とりて度たまえ」(原文を分かりやすくしている)と、道ばたに寝転んで暮らす物くさ太郎が、こともあろうに通るかかった土地の地頭、あたらしの左衛門尉に、道に転がってしまった餅を拾ってくれ、というのです。

左衛門尉が、太郎の申し分を聞かず、通り過ぎようとしたところ、太郎は、馬から下りて餅を取ってくれる簡単なこともしてくれない、そんな物くさき人がどうして所領を知行できるのか。「あら、うたての殿や」、情けない殿御だと非難したのです。

ところが地頭は、この領内の厄介者を前世の宿縁と不憫に思い、食っていく手立てをあれこれ提案するので、太郎は「ものくさし」と断ったので、村里の者に扶養を命じたのでした。村里の者は「合わぬは君の仰せかな」と思い、やむなく扶養して三年が経ちます。

後半では、太郎は村里に仰せつけられた京での長夫という力役奉仕に「これほどまめなるものはあらじ」と励みます。



画像出典：小学館『日本古典文学全集』御伽草子集より、版本御伽草子絵

私はレポートで、太郎の持つ生まれ性格が、「物くさ」であれば、後半の「まめなる」ことは矛盾し、お話は成り立ちません。若いときは物くさ、しかし職を得るとまめ名人になって、辻取りという当時の婚活に成功する、という当時の話は、半世紀前の学生の姿にも似て、出世譚を超え、現代的(半世紀ほど前のこと)だと述べました。

今、就職氷河期を前に、物くさで自室に引きこもった若者に、あるとき就職があつて自分を取りもどし、「まめ」になったというようにめでたい歴史事実の物語が沢山に登場しないものか、と夢見たりするこの頃です。

収蔵資料紹介

ヤチキリガマ

八月二十六日に終了した企画展「開墾の技術史」において、蒲原平野の特徴的な開墾用具として、ヤチキリガマを紹介しました(『帆船成林』第26号参照)。展覧会紹介の新聞記事で、この鎌についても取り上げたところ、新潟市在住の方から新たに二丁のヤチキリガマの寄贈がありました。また、少しずつですが情報が集まっています。

この鎌は「ヤチ」と呼ばれるヨシ(アシ)が繁茂する低湿地を切り抜き、原野を開墾する作業に使用しました。「ヤチ」という語は、江戸時代の文書にも「谷内、谷地、野地」などの漢字表記でよく登場し、蒲原平野の開墾の主対象でした。

当館では低湿地の開墾用の大鎌を、所蔵資料の名称をとってヤチキリガマと呼んでいます。同種の大鎌の民具の名称は近隣の地域でもさまざまです。蒲原平野ではヨシヤガツボ(マコモ)など低湿地の植物の根茎層を指す語が多様で、『蒲原の民俗』の著者金塚友之の調査によれば、地域ごとにオイカタ、イグレ、イグリ、イボ、プタなどがあります。そして、それぞれの地域で開墾用の大鎌は、根茎層を切断するという意味で、イグレキリガマ、プタキリガマなどの名称で呼ばれ

ていました。名称の多様性も地域の特徴を考える上で興味深い事柄です。

この鎌を使うて開墾するとき、まず大きな刃を分厚い根茎層でできた地面に縦に突き入れ、前後左右に、約三〇センチメートル角で切っていくました。地面の状況によっては、下側の根茎層を切断するために地面の下に水平に鎌を入れました。切り取った根茎層は、天地返しして腐らせたり、他の場所へ運び出してかわりの土を客土したりして水田としました。



ヤチキリガマ(新潟市歴史博物館所蔵)

この鎌は、蒲原平野の中でも近年まで大きな溝が残っていた地域では博物館・資料館に収蔵されていますが、そうでない地域には残っていないという特徴があります。こういった地域に調査していく予定ですが、ヤチキリガマは常設展示室でも展示していますので、機会があったらご覧下さい。

(岩野 邦康 学芸員)